

## 廉塾生への追悼詩 (一)

副会長 黒瀬 道隆

近隣のみならず、全国からの集まった塾生は、さらに三都へ遊学したり、故郷で開塾したり、藩儒に登用される者もいた。

しかし、志半ばにして死去する塾生もいた。没した塾生への追悼の詩を黄葉夕陽村舎詩に見ることができる。入塾中に没した塾生について述べてみたい。

### ○ 三谷尚玄の死去

文化六年（一八〇九）正月九日、讃岐国から入塾し、学がなって帰国直前の死去。

茶山日記に「八日、雨、三谷尚玄没す。没時、午（午夜）を過ぐ」とあり、網付谷の菅家墓地に葬られる。

### 三谷尚玄墓誌 黄葉夕陽村舎文 二一十一

「三谷は其姓、尚玄は其称、名は異、字は子功、讃州金倉の人、来りて余が塾に、備後神邊驛に字ぶ。業成りて将に帰らんとして、適たまま病みて没す。文化己巳正月九日なり。權か

りに驛の東南網付谷に葬る。年二十三、人となり方面長身、沈敏にして才有り、苦学篤行、傍ら医及び詩を能くす。翹ぎょうぎょう翹として諸生の秀たり矣。才を抱きて夭するは古より少なから

ず、斯の人の善を為して、亦た免る能わざる邪か。噫ああ。（もと漢文）

語註「翹翹」群れに抜きんでている様。「噫」あわれみ痛む声。

文化四年の暮れに茶山が詠んだ詩である

### 即事 贈三谷子功諸子 前編八一十二

寒夜 衰翁 夢驚き易し

愁心空しく伴う一灯の明るきに

書寮 頼たのいに君が曹の寓する有り

喜びて聴く 伊吾 暁を徹する聲

語註「衰翁」老人、茶山を指す。「書寮」廉塾の寮。「曹」部屋。「伊吾」読書や歌のえる様。

（大意）茶山は廉塾規約の中で「素読は毎日すること」「詩は妄りに作らず読書を第一にすること」としており、読書を奨励している。寒夜に夜遅くまで素読の声が聞こえてくるのを喜ばしく思っていたのであろう。当時、三谷尚玄はその書寮の寮長であったので、彼に期待を寄せていたことが先の碑文で分かる。

（次号へつづく）



三谷尚玄の墓